

無災害継続を目指した我が職場の 安全活動について

下呂営林署 焼石担当区事務所 斎藤道雄
小川保

1. はじめに

わが焼石担当区では、年間を通じて造林事業を主体に、基幹作業職員6名で事業を実行している。

過去の労働災害を分析すると、そのほとんどが不安全行動によるものであることから作業基準に基づく安全で正しい基本動作の定着が必要であり、各自の自覚とそれを行動に移す積極的な姿勢をみずから身につけることが肝要であると思う。

このため、私達の班では、安全は与えられるものでなく自分達で考え作り上げることを目標に、話し合いの中から「決めたこと、決められたこと」は確実に守る積極的な日常の安全活動を推進してきた。

その結果、昭和50年1月28日以来、12年間にわたり無災害を継続中であり、延べ時間も34万時間を達成することができた。

今回、私達の取り組んで来た安全活動の成果について報告する。

2. 具体的実施事項

(1) 職場の「和」作り

「朝、ミニバスに乗ったら全員が家族である」を合言葉にしている。

明るく健康的な職場作りは何よりも「和」が大切であると考え、家族的な雰囲気の中で日々の作業に当るよう心がけている。

このため、安全に関する事はもちろんのこと、個人的な悩み事でも遠慮なく話し合える雰囲気作りにつとめ、思いやりと助け合う気持ちを高めることで、安全確保に大きく貢献している。

また、各人の気持を理解し合うことの積み重ねにより、作業中の意志疎通を大切にすることは、連携の悪さからくる災害防止に役立っていると考えます。

(2) 危険予知活動

私達の班では、危険予知活動を6年前に全員の話し合いで決め、取り入れた。朝のTBMで前日作業を行った中での問題点、注意すべき事項を全員で出し合い、当日の安全当番は特に注意すべき点についての危険予知を行い、各現場休憩所に設置した黒板に記入し周知徹底を図る

ことにしている。

作業終了後には、安全当番が中心となって1日を反省しハッとすることはなかったかをみんなから聞き、安全日誌に記入している。

(3) 指差確認の完全実施

昭和60年7月、造林事業における指差確認の実施要領を定め、実施に移されたが「項目が多すぎて忘れてしまう」「疲れて声が出ない」「声が出ても指が出ない」などの問題点が現場から出された。

とくに、除伐Ⅱ類等の立木伐倒作業の指差呼称については、伐倒本数も多く、実施には相当困難をきたしたことから、各現場の意見を集約し、実効性のある10項目に改められた。

はじめは、慣れないこともあり、抵抗もあったが、現在では「声・指」ともに出るようになり、基本動作の習慣化や一歩進むごとに変化する作業条件への対応など、各自が自立的に安全行動を行える状態となって、安全確保に大きな効果をあげている。

(4) 自主健康管理

当班では、毎年のように私傷病による長欠者が出ていた。しかし中には30年余にわたって私傷病、公務災害のない人や、永年にわたって無災害の人もいる。

これは、自分自身で行う健康管理の重要性もさることながら、家庭も含めた健康管理のたまものではないだろうか。

職場においては、緑十字の日、安全懇談会等を利用した、血圧測定を自主的に実施することにより、健康管理意識を高め私傷病の絶滅を目指している。

また、TBMで各人の健康状態の把握につとめ、疾病の早期発見、早期治療につとめている。

毎日健康な体で働くことは、うっかり、ぼんやり事故防止には大切なことで、何よりの安全活動だと思っている。

(5) ミニバス運行の安全確保

当班では作業地への通勤に必ず国道41号線を利用している。ここは年間を通じて観光客や長距離運送の車の通行量が多い所であり、道に不慣れなドライバーの多い所でもある。

助手席には翌日運転する人が乗り「助手席同乗者も運転しているつもりで安全確認」の励行と、路面状態を確認することになっている。

また、落石は確実に取り除いて通行するなどミニバスの安全運行に心掛け、防衛運転に徹している。

3. ま と め

以上が私達の班で行っている安全活動の概略であるが、安全は「これで良い」「これだけやっ

「だから良い」と言うものではなく、日常の地道な積み重ねによる気の長い取り組みが大切である。

そして、安全に関しては、自分の物として身につくまでは、何度でも言い、定着させていかねばならない。

このことは、同じ事の繰り返しとなりがちで、どうしてもマンネリに落ち入りやすく、「慣れ」からくる災害の誘発要因ともなりかねない。

マンネリを打開する一つの方法としては61年度からバイオリズムを活用し、各自で危険管理をしている。

これは、毎日ただ漠然と、今日1日を安全にではなく、各人の節目としての安全管理に役立っている。

仕事のけじめに山の神に参ることと同様、精神的な引締めは重要である。

今後も、「自分自身痛い目に合わない」「仲間を痛い目に合わせない」という気持ちを基本にした、安全活動に取り組んで行きたい。

最初に述べたように、安全は与えられるものでなく、自分達で考え、作り上げることこそが最も重要なことである。

全員の話し合いの中から生まれる、自主的で積極的な安全活動を、推進して行きたいと考えている。

最後に、今年度の担当区安全目標「目くばり気くばり怠らず、無災害記録を更新しよう」を合言葉に今後も頑張っていきたい。